

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091800138		
法人名	有限会社 ケアサービス九州		
事業所名	グループホーム ふぁみりー伊川		
所在地	福岡県飯塚市伊川原の前1番地1		
自己評価作成日	令和4年9月23日	評価結果確定日	令和4年10月24日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和4年10月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

基本理念に含まれている、自立、自己決定・生活の継続を意識し日々の支援にあたっている。毎日のラジオ体操1・2で身体をほぐし、自分たちの手で、美化に取り組んでいる。雑巾で手すりを拭く人・箸を持つ人、それぞれが選択し職員と共に取り組んでいる。私達は「家庭的」を心掛け、その方の居場所作りを支援して行きたいと思っています。
地域との交流は、コロナ禍のためなかなか難しい状況ですが、コロナ終息時には積極的に参加していきたいと思っています。このような中でも、直接面会する形ではないが、近隣の保育園との交流会は続いている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

基本理念や運営方針を諳んじ、月目標に「聞き上手で傾聴スキルを高める」を掲げ、全職員が一丸となって入居者や家族が安心・満足・信頼できる関係作りや居場所作りに務めている。10時や15時のゆっくりとした時間にテーブルを囲んで食べたい物などを尋ねたり、不安や心配事に寄り添う支援で、入居時は言葉が出てこなかった入居者が「栗ご飯が食べたい」と話したり、ホーム周辺の散歩では、「(ホームは)ここ」と自ら戻るまでになっている。主治医や訪問看護事業所と良好な連携で、6月に看取りを支援した家族から「伊川におられて良かった」と謝辞があった。運営推進会議は書面報告であるが、近隣の方々や敷地前のリサイクルボックスの管理や季節の野菜のおすそ分けなどが継続し、家族に通信や写真同封で毎月個々暮らしぶりを報告するなど、地域や家族の理解や協力を得ながら、コロナ禍の中地域密着型サービスが展開している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 **グループホームふぁみりー伊川**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝の申し送り時に理念の唱和を行っている。また理念を意識した月目標も掲げ支援の意識統一を図っている。ミーティングでその意味について説明する機会も設けている。	職員は基本理念や運営方針を諳んじ、月目標に「聞き上手で傾聴スキルを高める」を掲げ、職員が一丸となって入居者や家族が安心・満足・信頼できる関係作りや居場所づくりに務めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍に伴い、夏休みのラジオ体操の中止、地元幼稚園との交流も中止(カード・プレゼント交換のみ)になり地域の方々との交流は難しいです。	開所以来敷地前に設置されたりサイクルボックスの管理を担い、毎日リサイクルボックス周辺を清掃される近隣の自治会長や住民の方々と挨拶を交わしている。入居者家族から頂いた筍を近隣におすそ分けしたり、近隣から季節の野菜をいただくなど、地域の一員として交流を継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍に伴い、ホーム見学は難しい状況です。そのため認知症の理解や支援方法を知って頂ける機会は減っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍に伴い、定期的に行われている運営推進会議は書面による質疑応答の対応を取っています。貴重なご意見をサービス向上に繋げる様に努めています。	令和4年度は、運営推進委員の自治会長や元家族、訪問看護事業所、市担当者等に書面で行事や入居者の暮らしぶりなど報告し、意見を願っている。会議録は玄関で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の参加で、グループホームの取組みを伝えられる機会が減っている状況ではあるが電話などで相互の協力関係を築くよう努めている。	市担当者に毎月FAXで居室情報を提供しているが、現在待機者が3名ある。大事に至らなかったアルミ箔の異食など事故は、経緯や内容、対応について早急に報告し指導を受けるなど、日頃から連携に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年2回の研修を行っている。加えて毎月の職員会議で防止に向けての取り組みをしている。ホームの玄関は全開の状態で開放的な空間を築いている。	研修や毎月の職員会議で、身体拘束の具体的な内容や言葉のよる拘束について周知し、適正化に努めている。家族の要望でセンサーを設置したり、家族の了解を得て夜間のみ転倒を防止するため、センサーを使用している入居者もある。入居間もなく「お父さんは」と自宅の伴侶を心配する入居者の気分を変えようと、ホーム周辺を散歩している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の職員会議で身体拘束に付随し、検討をしている。 『虐待の芽チエックリスト』を活用し意識の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	代表は実際に後見人を引き受けている。職員は毎年、県の「介護技術向上研修」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階に合った研修を全員受講している。	現在まで日常生活自立支援事業や成年後見制度を活用している入居者はないが、運営者が後見人を引き受ける系列事業所もあり、状況に応じて事業や制度を説明できるように、資料を整備している。	今後さらに多様な家族構成が予測されることから、日常生活自立支援事業や成年後見制度の内容やその違いに関する研修を期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は概ね1時間を費やし、十分な説明と意見を聞いている。看取りに関することも本人様、ご家族様の思いを伺っている。相互の思いが理解できる時間が作れていると感じる。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱は設置しているが、活用には、至っていない。家族会、運営推進会議などの場で意見・要望をお聞きしたいがコロナのため、出来ていない。来ホーム時には、対話の時間を設けるよう配慮している。	家族からの要望で、2ヶ月毎の通信だけではなく毎月個々暮らしぶりを写真を同封して報告し、安心・満足・信頼できる関係作りを目指している。火事などを被災した場合自宅避難が可能かとのアンケートには、帰宅は難しいとの回答が殆どであった。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の全員参加職員会議で意見交換は出来ている。必要に応じて面談も行っている。代表に繋がったほうが良いときにはお願いしている。	毎月の職員会議は運営者が参加している。率直な意見交換が行われ、必要時には個人的に相談できる環境となっている。車椅子の購入や浴室の呼び出しチャイムの設置が実現し、正月に全入居者にハンカチをプレゼントしたいとの提案が叶い、入居者が大喜びしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎回のミーティングに加え、定期的に施設訪問し、施設長、ケアマネ等とデスクッションを重ね、問題点の改善に努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	70歳までの継続雇用を明記。年齢ではなく、仕事に意欲があるか否かで判断している。個人が選んだ外部研修(2回)に出勤扱いで、応援、自ら学ぶことを推奨している。	職員の口コミや民間広告で、21歳から69歳の男女の職員が常勤やパート、夜勤専従など夫々の状況に応じて勤務している。県の「介護技術向上研修」やオンライン研修で知識やスキル向上を支援し、資格取得を推奨している。休憩室で昼休みを取り、希望休が叶い公休も取れて働きやすく、中には再入職した職員や子育て中の職員もいる。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	年間研修に組み込んでおり、必要に応じて顧問の社会保険労務士にコンプライアンス及び接遇研修を受ける機会を設けている。	「人として尊厳と心のふれあいを大切に」と基本理念に謳い、人権に関する研修を年間研修に組み入れている。入居者への言葉遣いとともに、前回の目標達成計画には職員同士言葉遣いを正し、敬語での対応を掲げている。	以前活用していた「ありがとうシート」の目的を問い直し、職員夫々が担う役割を確認しながら、補い助け合えるチームづくりを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の段階に応じて外部研修を推奨。また、個人研鑽のための研修にも自主参加の機会を設けている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	福岡県高齢者グループホーム協議会、ケアマネット博多、飯塚市地域密着型サービス事業所連絡会に所属し、個人的にも、みんなの認知症ケア学会に所属し、その情報を施設にフィードバックしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人、ご家族に事前に見学して頂き納得の上入居して頂いている。入居待ちで複数回お見えになるご家族もおられます。要望等をしっかり傾聴しています。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	信頼関係の構築が介護の目標ととらえている。ご家族と本人の思いが異なることもあり調整に苦心することもあるが協議を重ねながら、出来る限り取り入れるよう心がけている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームではまだないが、法人全体としては小規模多機能に紹介して在宅に復帰して貰ったケースもある。医療の選択も自由である。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることを奪わない介護を心がけている。本人が「有り難う」を言われる機会を沢山作ることが大切であるとの観点から、テーブル拭き・下膳・洗濯物干し・たたみ・掃除など一緒にしていただいている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の訪問は頻回にあるが、コロナ禍のため玄関先での対応をさせて頂いている。色々な意味で家族の支援には感謝している。お互い屈託ない意見が交換できていると感じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で関係が途絶えている事もあるが、馴染みの場所に行くことや馴染みの美容室・化粧品店行へく支援をおこなっている。	家族との年賀状やり取りや、馴染みの化粧品購入の支援を継続している。管理者は、髭をそり身だしなみを整えて面会に訪れたり、手を取って並んで座るなどの伴侶夫々の姿から、夫婦の関係継続を支援したいと話している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ソーシャルディスタンスを考慮し利用者同士の会話がしやすいように、テーブル・ソファの配置変えを行った。自然と会話が成り立っていると感じる。利用者同士の世話がもう少しあっても良いとは思いますが、手探り状態である。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	殆ど看取りでの契約終了であるが、職員・入居者の紹介で立ち寄って下さる家族もいる。運営推進会議のメンバーに残って下さっている方もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントシートを更新して利用者の暮らしの要望が、少しずつ増えている。嗜好を聞き食事やおやつに反映。行きたい場所に行けるよう努めている。	10時や15時のゆっくりとした時間に、テーブルを囲んで食べたい物や行きたい所を尋ねているが、職員の心のゆとりを生み出し入居者との円滑な関係に一役買っている。調査日、管理者が声をかけた不安げな表情の入居者は、「あんた(管理者)の姿が見えなかったから」と話す等、「聞き上手で傾聴スキルを高める」との月目標を実践している。	全職員で情報を共有し、さらなる思いや意向の把握をするためにも、アセスメントのエビデンスである特記事項の明記を期待します。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用して馴染みの習慣や暮らしを把握するよう努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人様の言葉や行動を記録に残すことを意識付けしている。そのなかから自立支援への出来ること探しをしていく。訪問看護師とも連携し心身の状態の把握に努めている。運営推進会議にも参加して頂いている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランは成果と反省、新しい課題を分析協議しみんなで作り上げる。モニタリングは毎日チェックし、介護記録に反映するよう努めている。	介護計画に沿った介護記録に努め、朝礼やミーティング時に、具体的な援助について活発な意見を交わしている。病院から直接入居し、言葉が出てこなかった入居者が「栗ご飯が食べたい」と話したり、ホーム周辺の散歩で家に帰りたいたいと思いに寄り添う職員に「(ホームは)ここ」と自ら戻るまでになっている。	介護計画の短期目標やケア内容をより具体的に記載し、全職員による統一したケアの展開で、さらに安心・満足・信頼できる居場所作りを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護日誌・介護記録を活用することは勿論だが、申し送りノートを利用している。出社時、必ず目を通して業務に就くことを確認・実行している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院・受診など家族の事情を踏まえ柔軟に対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域開催の「いきいきサロン」や本人様の生活の場だったサロンへの支援を行っているが、コロナ禍のため実現できていない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時、本人様・ご家族の希望を優先している。24時間対応で救急医療体制、連携もとれている。入居中の歯科・眼科受診が生じた場合はご家族との話し合いで対応している。	月2回、2か所の医療機関から往診を受けている。家族の主治医への信頼が篤く、24時間対応の訪問看護事業とも連携し、適切な医療受診を支援している。家族の希望で訪問歯科や訪問マッサージを受ける入居者もある。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1の訪問。連携は密にとれている。医療的なアドバイスを理解出来るよう説明して頂いている。夜勤者も安心して業務にあたっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族・病院との連携はとれている。家族との情報の共有にも配慮している。安心して戻って来られるよう、早期退院へ向けての話し合いも行い、実行している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時にも重篤化、看取りについてご家族の意向を伺います。(同意書あり)ご本人とは自然の会話の中で折に触れ想いを聞きます。状況の変化で思いが変わる事も視野に入れ対応していきます。ホームでの自然な看取りを望まれるケースがほとんどです。	入居者全員がホームでの自然な看取りを希望されている。主治医から終末期と告知され6月逝去された方は、経口摂取ができなくなって1週間後に逝去され、家族から「伊川におられて良かった」と謝辞があった。主治医や訪問看護事業所と良好な連携で職員は不安はないが、訪問看護師が看取り後のメンタルケアの相談や支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時のマニュアルを必須研修している。対象となる入居者がいたときは、振り返りで訪問看護師より指導を受けている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の火災・通報・避難誘導訓練は行っている。	令和4年度は8月に消防火災のDVDで学習し、11月は、夜勤帯で職員連絡網の可動や水消火器による訓練を予定している。公的な避難場所や集合場所を理解し、防災の日には備蓄一覧表を見直し、消費期限真近いカップ麺等を試食している。防護服のセット等感染予防グッズも備蓄している。	自然災害や新型コロナウイルス感染症発生時における事業継続計画の作成にあたり、系列事業所のクラスター発生時の対応が活かされることを期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年間研修で「プライバシー保護の取り組み」を必須研修として学んでいる。プライバシー侵害かと思われる行動が目につけばお互いが注意・指摘しあえる職員の関係を今以上に作っていき、学んでいきたい。	年間研修計画にプライバシーの保護を組み入れ、虐待の芽チェックリストの活用で、入居者の尊厳を損なわないケアに努めている。大きい声で入居者の排泄状況を報告し合ったり、夜勤帯でトイレのドアを開放した対応を、自分が受けたらどうかと我が身に置き換えて考えるように促している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活上での諸々の選択、嗜好の選択、そして決定を増やしていきたい。10時の憩いの時間で、「〇〇が食べたいね」「〇〇に行きたいね」と話が出ればすぐにでも行けるよう努力します。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本、食事や入浴の時間は決まっているが本人様の要望、体調を優先し柔軟に対応している。他の時間帯は個々に過ごして頂いているが、癒しや寛ぎになっているか見極め支援を心がけている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴前の衣類の準備は一緒に行っている。朝の挨拶の折「よく似合ってますね」など褒めることを意識し行っている。お一人が散髪されると「次は私！」と待たれるなどオシャレに関心を持たれることが増えてきた。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現入居者で食事の準備を一緒に行う事は難しいが、テーブル拭き、食後のトレイ拭きなどお願いしている。下膳される方は少ないが、車椅子の人はマグカップだけでもカウンターまで下げていただく。	調査時は入居者希望の季節の栗ご飯だったが、希望したことや栗を食べたことを忘れ、栗が入っていなかったなど、賑やかな食卓となっている。誕生日は写真カタログで注文した高価なお弁当に舌鼓をうったり、刺身や海鮮丼など、希望の食事を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分・食事の摂取量はチェックを行い栄養状態を把握している。カリウム値の高い方には、野菜の湯でこぼし・水にさらすなどの対応をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	2週に1度歯科診療での口腔ケアもあるが、毎食後のケアも欠かさず行っている。義歯は夜に洗浄液に付けて管理している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	入居者の排泄パターンに応じてトイレ誘導を心がけている。パットの使用量を減らす努力をしている。	医療機関退院時前止めおむつの入居者は、座位保持ができるためにリハビリパンツ使用となり、現在は失禁なく過ごされている。体力低下などで尿路感染症となった入居者は、陰部洗浄やシャワー浴の励行で感染症が改善し、食事量が増えて体重が増加している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	医師の指示にて薬を用いることはあるが、食べ物・水分・動くことを意識づけ極力薬は避けている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	本人様の希望があれば夜間を除きいつでも入浴出来る体制は整っているが、一応一日の入浴者は3名ほどになっている。お風呂が、大好きと言われていても自然と拒否の日が増えることもある。	週3回を目途に入浴を支援している。昨今入居された方は自前のシャンプーやリンスで入浴を楽しんでもらっている。入浴を強く拒否される方もあるが、職員の関わり次第で入浴され、「しばらく入ってないから汚くてごめんね」や、暴言なども「ありがとう」になっている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	車いす使用者(6名)は浮腫軽減の為、午後には居室にて休んで頂いている。他の方はホールソファで傾眠などされている。夜もしっかり休まれている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師・薬剤師の指導のもと管理を行っている。事故防止の為、薬のセッティング→確認→服薬時の声出し(日付・名前・食前・食後)の3度に渡り確認するなど細心の注意を払って支援している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者の楽しみや、居場所づくりにはいつも心がけている。食器は陶器を使用している。誕生日会では、本人様の希望の献立などお聞きし楽しんで頂いています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍に伴い外出は自粛している。以前は毎年恒例のバスハイク(温泉・花見・料理)、地域の方・ご家族を招いての秋祭りを行っていた。今年近所の公園でのお花見となった。	今年近隣の公園で花見をしたり、桜の花の下で弁当を広げている。地域の系列ホームの管理者から、3日間に分けて全入居者と職員でリング狩りに行くとの情報もあった。感染状況が収束の折には、地域の大型テナントに買い物に出かけたいと管理者は話している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物に行く支援は、コロナの現状を踏まえ、現在は控えている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所持している方は1名おられるが、家族との会話は今のところない。年賀状はご家族に出している。好評である。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室には手作り暖簾をかけている。ホーム内の装飾や食事にも季節感を出すよう心がけている。 ホーム内に尿臭が無いよう心がけている。	デコパージュの鳥や花が見事に描かれた玄関のガラス戸は日中は開放され、玄関から正面に食堂や居間、東側に設けられた居室が見渡せる。大きな梁のある高い天井は、明るく開放的で、畳コーナーでは洗濯物をたたんだり、時にはごろ寝をする場所となっている。換気や空調が管理された居間のテーブルは、感染予防のためアクリル板が設置され、清掃が行き届き、心地良い空間となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	暖簾をかけていることにより、居室のドアを開けて頂けるようになった。その為、ホール全体が明るくなり、居室に一人で籠りつきりと言うのが無くなった。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用されていた馴染みの品を出来るだけ持って来てもらってる。食器(飯碗・湯のみ・箸)は個人のものを使用している。少しでも家庭に近い状況で生活を願っている。	各居室入口に掛けられた短めの手作り暖簾は、共有空間との間仕切りとなり、居室の様子を伺う効果もある。担当者が許可を得て清掃し、馴染みの家具や品物が置かれた居室は、遺影に仏飯を自らあげる方もあり、家庭的で居心地良い清潔な空間となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム全体がバリアフリーとホール周りの手すりの設置により安全な環境整備を心がけている。また、ホーム内の置き物が障害物とならないよう気を配っている。		